

## 『吾輩は猫である』種痘

Junko Higasa 2016.5.19

第九章に、苦沙弥が天然痘痕である「あばた」を気にする話が出てくる。これは漱石自身の投影であり、その原因となった種痘は「牛痘接種法」である。

1796年にイギリスの医師 E・ジェンナー(Edward Jenner 1749～1823)が、「牛痘に罹れば天然痘に罹らない」という酪農家の言から、使用人の息子に牛痘ウイルスを植えた後、天然痘ウイルスを接種するという実験をし、人の体内に免疫を作ること成功した。その後改良された痘苗が 1848 年に日本にもたらされ、1849 年に免疫作りに成功した。

そこで 1870 (明治 3) 年 5 月に種痘全国実施。3 歳の漱石もそれを受けたが不成功。逆に天然痘の症状に苦しんだ。天然痘の症状は、高熱を発し、顔面・頭部中心の全身性発疹が「紅斑→丘疹→水泡→膿疱→結痂けっか→落屑らくせつ」と変化して痕を残す。それで漱石の顔面と頭部にはあばたが残っているのである。

ところで秋月藩医：緒方春朔は 1792-3 年に人痘種痘法で天然痘を治した。浅田宗伯は漢方で難病を治した。しかし日本は文明輸入に伴う病原菌阻止のために西洋医学を選択した。けれど猫にもいろいろいる如く牛にも品種がある如く、人間にも体質の違いがあり、特に皮膚は洋の東西で違いが顕著である。即ち漱石の顔面は、日本の「国強化人材確保急務の西洋化推進時代」を映す鏡なのである。牛痘の母国語(英語)を教える漱石は、顔で日本史を教えている。